

日本幼稚園史序

倉 橋 惣 三

今日我が國の幼稚園は千六百を超え、その分布も亦全國に亙つてゐる。これに朝鮮、臺灣、滿洲方面に於けるもの、及び保育所、託兒所等の名稱を以て行はれてゐるものを加算すれば、更に非常の多數に上る。學齡前幼兒の保育施設に對する留意は、動かすことの出来ない一大社會事象となつてゐるのである。殊に近年に於て、その新設率は一層の高上を示し、年々共に愈々益々著しき發展の勢をあらはしつゝある。而して、その因つて來る所以が、幼兒保育の重要性に對する理解の進歩と、現代社會の現實的事情から生ずる要求によるはいふまでもないが、この發展の氣運が大正十五年の幼稚園令公布によつて著しく促進せられたことと共に、更に遡つて、その遠き根元が明治九年の國立幼稚園創設にあつたことを忘れることは出来ない。すなはち、我が國の幼稚園は、今日の普及に於て大いなる教育施設であると共に、その發達に於て長き歴史を我が國に有する教育施設である。

明治九年は、我が國に初めて學制が布かれた年から僅に數年を距てゝゐるに過ぎない。しかも、その頃は、學制が布かれたさいふだけで、全國の學齡兒童中小學校に就學せるものゝ實數は、未だ極めて少數に過ぎなかつた時代である。その時代に於て、疾くも學齡前教育の組織的施設が企てられたものである。殊に、明治九年を云へば、幼稚園さいふ名稱が初めてフレールによつて命名せられた年から僅に三十六年の後であり、フレールが世を去つた年から二十四年を経てゐる

るに過ぎない。フレールベルの幼稚園が獨逸以外に傳へられたのはその歿後のことである。フレールベル自ら往いてその幼稚園を開かうと考へたことのある亞米利加でさへも、歿後八年にして初めて有志家によつて私立幼稚園が創設せられたのである。その後十六年にして、我が國に官立幼稚園が創設せられたことは、當時の世界關係に於て、甚だ進歩的な著眼であつたまゝいなければならぬ。尙くわしく考へて見れば、明治九年は亞米利加の幼稚園を公立のものとした第一の先驅者ドクトル・ハリスが、セントルイスにその亞米利加最初の公立幼稚園を開設した三年の後である。その以前にも、幼稚園まゝいはざる幼稚園は既に我が國にもあつたのであるから、我が國の幼稚園は、世界的にいづつても相當早いものであつたといへる。當時の先覺者諸氏の進歩的識見に、深き敬意を禁じ得ないのである。

さて、その先覺者諸氏の貴い意圖と創業の苦心とに出發させて、我が國の幼稚園史を編纂したいといふことは可なり古くからの私の念願であつた。明治の終り大正の初め頃からであつた記憶するが、私は、當時お茶の水にあつた東京女子高等師範學校附屬幼稚園の倉庫に立籠つてはその古い資料を漁つたものである。實にその倉庫には豊富な資料が堆積されてゐた。私は、うす暗い光線と微臭い空氣との中で、若い胸を躍らせながら、初めて、和綴りの「幼稚園記」や「二十遊嬉」を見た。黒ずんだ美濃紙の手記書類や、色褪せた昔の特技や、圖畫なごをいぢくりまわしたりした喜びを、今もはつきり忘れない。たゞ餘りに手近かな便宜に氣を暢び暢びさせて、調べたものを急いで纏めるといふことを怠つてゐた。後、外遊のために暫くその方の仕事を中断し、歸つてからも引つゞき餘事に追はれてゐたが、そのうちに、あの大震災で、その倉庫も資料も一切灰燼に歸して仕舞つたのである。取りかへしのつかない損失を惜しみ悲しんだのは勿論、なまけものが受ける天罰に對して、しみじみ思ひ知らされたのであつた。

爾來、私の身邊は公私繁雜を加へて、落ちついて資料の再聚集をする暇を失ひ、自然この計畫も氣まぐれな漫歩的進み方しかしないであつた。然るに、私をして舊い熱意を再燃せしめる機會が起つた。それは、豫てお話を聴きたいと思つてゐた我が國最初の保姆豊田英雄女史を水戸の寓居にお訪ねしたところである。その時、種々の未知の資料について得るところが多かつた以外に、我が國の幼稚園史が、今ならば生きた記憶を資料とするところが出るさういふところに、今更のように強く氣がついたのである。殊に一ミ度びそこに氣がついて見るに、その眞に貴重な生きた記憶材料が、次から次に與へられ得ることに氣がついた。倉庫の焼失によつて力を抜かれてゐた私の舊い志は、もう一度私を驅りたてゝ來た。しかも、あの倉庫の中で、ゐながらにして惠まれてゐた資料は、その一冊、その一卷を得るにも今は容易のことにない。殊に忙しい私ひまりの手では、それが一層の難事たるを免れない。私は心ばかり焦らせて手を措いてゐる態であつたが、この時、私のために熱心なる協力者となつて呉れたのが新庄よしこ君である。東京女子高等師範學校文科の出身で、長く附屬幼稚園保姆として斯の教育に従事してゐる同君が、此の仕事の協力者として如何によき適任者であるかはいふまでもない。従つて、協力者といふも實はさつちが一層骨の折れる役廻りを受持つたかは、私のために言はぬが花であらう。實に、新庄よしこ君の大きい努力を俟つてこそ、此の書が出来上り得たさういふつてよい。

しかし、日本幼稚園史といふ大きい名稱に對して、此の書が頗る不完全のものであることは、著者等の今にして深く慚愧にたえないところである。殊に記述の進め方が附屬幼稚園を中心にしてゐるようになつてゐることは、此の種の著述として出来るだけ避けたいところであつたが、事實がさうであつた爲に已むを得なかつた。決して著者等の立場に偏したものでないことを諒せられたい。たゞ、私達の不敏から資料の聚集が難かしく、廣く各地方のこゝを詳かにし得なかつたことは、今以て遺憾させる點が少なくない。又幾多の不注意なる誤謬も脱落も無いに限りはない。充分なる補足と訂正とに就

て、識者の好意ある御助力を期待してゐる。尙ほ又、著者等の見解に基いて、記述を初期にくわしくして置いた。そのために、幼稚園史を稱して實は幼稚園發祥史の觀があるが、發達の實際に即して、おのづから斯くならざるを得なかつたことを認められたい。殊に第四篇は、まことに簡約を極め、他の諸篇との權衡を失つてゐるが、これは、今日の幼稚園を論ずる機會に於て多く語りたいたのであつて、本書としてはほんの結びをつけて置いたに止る。これを以て幼稚園史としての本書が輕重せられることのないよう、切に希つて置きたい。

最後に、本書の成るに就て、各方面から貴重の資料を供與して下さつた御好意を、種々引用の許可を與へて下さつた寛容さに對し、著者等の心からなる感謝を申上げる。又、本書の刊行に當つて示された東洋圖書株式合資會社社長永田與三郎君の、斯界に貢獻するところあらんことを誠意を特に銘記せざるを得ない。

昭和九年五月